

V 戦士

徳島県バレーボール協会 中学校専門部便り 春季第53号

充実していた指導者時代

那賀川中学校 校長 佐々木 善史

早いもので今年で退職を迎えた。38年間の教員生活であったが、その中で一番充実していたのがバレーボールの監督として生徒と一緒に汗を流していた頃である。退職する今思い出してみると、よくあんなことができたなあとしみじみ思う。朝夕に練習し、土日はもちろんなし、1年365日のほとんどを体育館で過ごした。大会や練習試合で保護者が車を出せない時は、自分でポンコツワゴン車を購入し県外遠征にも行った。とにかくバレーが好きでバレー部の生徒が好きだった。そんな甲斐あって県総体で運良く3度の優勝ができたことは、自分にとってよい思い出であり誇りでもあるが、なぜか勝った試合よりも負けた試合のことをよく覚えている。たくさんある思い出の中からいくつか紹介したい。

【思い出Ⅰ】

【総体初優勝】

総体での初優勝。38歳の時。それまで総体では何度か決勝に出たが全て準優勝だった。自分の中での目標を総体優勝に置いていただけに、目標を達成したときの喜びは格別であった。最後の1点、相手アタッカーのスパイクがアウトになる瞬間が臉に焼き付いている。

【思い出Ⅱ】

最後の試合での補欠選手の涙。いつも感動した。結束が強いチームほど最後の試合が終わった瞬間、補欠の選手から泣き出した。3年間毎日毎日同じ苦しさを味わいながら、球拾いをし続けた苦労は口では言い表せないものであろう。練習の終わりには毎日補欠選手をねぎらう言葉をかけ続けてきた。

阿南一中の頃、5月の連休に鳴門一中（当時県下一）と練習試合をした。裏エースの2年生が病気のため急に休み、3年生の補欠アタッカーが練習試合に出場し、試合に勝つことができた。次の日にその3年生の補欠アタッカーが、バレー日誌に「昨日は試合に出れ



てとてもうれしかった。でも私はやっぱり縁の下の力持ちでいいと思った。これからもレギュラーの相手としてがんばっていきたい。」と綴ってあった。そのことをミーティング時に話すと全員号泣した。それから3ヶ月チームは強い絆で結ばれた。総体は敗れたが、、、そういった補欠選手の献身的な支えがあるからこそチームは成り立つのである。これはどんな組織にも当てはまることである。指導者晩年にチーム作りのコツは何ですかとよく他の監督から聞かれた。迷いなく答えた。「チーム作りは補欠作りです」

【思い出Ⅲ】

練習の気合いが足りないと大会への参加申込書（当日申し込み）細々に破り捨てて帰ったら、次の日会場に粉々の紙切れを一枚一枚セロハンテープでつなぎ合わせて持ってきた。「先生試合に出してください。」その気合いに押されて試合に出したら、ものすごい集中力で優勝した。鬼気迫る表情やプレーを見て、人間は気持ちがあればこんなことができるんだと感動した。選手は時に思わぬ力を発揮することがあるのをしばしば見てきた。

【思い出Ⅳ】

試合中、選手が緊張のあまり頭がよく真っ白になった。小学校の時からあまり試合に勝った経験のない選手は、力が付き強くなっても、なかなか試合でその力を出し切ることができない。勝負がかかった場面ではまるで石のように動けなくなり、力を出せないまま負けてしまうことがあった。持っている力を100%出すにはどうしたらいいんだろう。私の監督としての大きな課題であった。監督として指導した最後のチームは運良く総体で2連覇することができたが、当時のキャプテンが弁論大会で発表した。「緊張してどうしようもない時は、3年間球拾いをしてくれた補欠の子の顔を思い浮かべた。誰かのためにがんばろうと思うことで勇気が湧いた。」私のバレー人生の集大成は、このキャプテン一言に尽きる。ちなみに今彼女は広島で歯医者さんをしている。



【体育祭にて 選手と一緒に】



【四国選抜優勝大会にて】

毎日やっていたバレーボールを離れて早15年になる。その間は管理職としてバレーボールへの情熱を学校運営に変えてがんばってきたつもりであるが、やはりバレーボールに携わっていた時が一番充実していたし、心も熱かったように思う。

監督時代に多くの方に助言をしていただいたり励ましていただいたりした。人生の一時期でも、こんな素晴らしい体験をさせていただいたバレーボールと、バレーボールを通して知り合った全ての方に深く深く感謝を申し上げ、最後の挨拶とさせていただきます。これからも何だかの形でバレーボール界に恩返しができる日が来ればと思っています。

1年生大会

徳島県バレーボール協会 副会長

立石 房徳

平成17年3月5日（土） この日に第1回目の徳島県中学校バレーボール1年生大会が開かれました。どのようないきさつで1年生大会を開いたのかを、私の知っている範囲でお話いたします。

私が専門委員長をしていた平成15年頃から平成18年に全国中学校体育大会（徳島大会）が開かれることが決定していたので、強化をどのようにしていくか議論し始めました。有望な選手を集めて強化していくことも検討されましたが、それよりか、各チームで試合経験の少ない1年生を対象にして、モチベーションを高めていくことが大切ではないかという結論に至りました。ただ、新人大会や選手権大会のように3日間の開催は難しいだろうということで、一般選抜願書受付が終わった3月の第一週に1日だけの開催を決めました。

当時の要項を作成するにあたって次のようなことを考えました。

競技方法(案)

- ・全中大会を担う1年生だけの大会で、まだまだチームとしては未完成と考えれば、試合の経験を多くのチームができれば実のあるものになると考える。
- ・未知数のチームが多いので、トーナメント方式で順位を決めれば1日で優勝・準優勝を決めるのは試合数からしても困難である。
- ・そこで、徳島県を3つのブロックに分け実施すればよいと考える。

《16チームの場合》

- ・コート数を4面使用
- ・ABCD, EFGH, IJKL, MNOP の各4チームに分かれて1セット回しでリーグ戦を行う。各コートで6セットするようになるので、9:30から試合を始めても12:00過ぎには終了する。（公式練習は最初のセットだけ。）
- ・各コートの上位2チームと下位2チームに分かれてトーナメントをすれば、17:00くらいには閉会式が可能である。

今思えば無茶なことを計画したかなと思います。各チームの参加数を予測し、男子は全県区の1会場、女子は3ブロック（中央、南部、西部）の会場で実施することとなりました。そして、男子は5チーム、女子は37チームが参加して行われました。

全国中学校体育大会（徳島大会）が終わり、当初の目的であった、徳島大会に向けての強化という面はなくなりましたが、1年生に広くバレーボール実践の機会を与えて、モチベーションを高める目的で現在も続いています。今回から女子は2ブロック開催となりますが、この大会に出場することでバレーボールが好きになり、上手になりたいと選手に思っただけであれば幸いです。